



a domine Maschine
Henri Matsui
1990.10.18

鎌倉の猫事情 第十九話

COLUMN

草木も眠るといふ真夜中に、綺麗な声で鳴く鳥の声が聞こえてきます。今もまだ、この小町で真夜中に鳴く鳥がいるのです。高い声でビヨビヨと鳴く声は、闇の中で鋭い目を光らせて小動物を狙う怖いミズクの声ではないようですが、今はすやすや眠るゲーニー君も、真夜中にうっかり表を散歩して、ミズクなどに狙われたら大変です。家の中ではなかなか勇敢なゲーニー君も、闇に潜んで、高い所から襲撃されるとは思ってもいません。夜はおとなしく家の中にいて、出掛けない方が無難というものです。

ところが、ある夜、このミルクホールの中で我が目を疑うような事件が起こりました。昼間はたくさんの人達でにぎわうミルクホールも、夜になるにつれて静かになり、閉店間際にはお客さんの姿もまばらです。閉店時間を迎えると、従業員たちは早く家へ帰って一日の疲れをとり、いそいそと片づけを済ませます。灯りを消し、彼らが我が家へと帰っていくと、ミルクホールはすっかり静まり返って昼間の喧騒とは違って変わった静かな空間。ちょっと何かが出そうな気もしますが、それさえ気にしなければ居心地の良い場所なのです。

そんな誰もいない真夜中のミルクホールのBARを独占してクラシック音楽などを流して幻想的な気分ひたしてみようというのはちょっとした贅沢です。が、近頃ではそんなひとときでも退屈きった猫達がつきまとい、静かに音楽を聞くところではないのです。酒瓶の間を走りまわったり、ピアノの上を探検してまわる猫達を叱り飛ばしているばかりで、どうにも落ち着かないのです。その夜もせっかくの気分は猫達の乱暴で台無しになり、今夜はもう引き上げようと考えていました。その間も2匹はあちこち駆けまわり、どんなに声をかけても聞きません。カウンターの中でガサガサとあらぬ音まで立て始めました。

「もう、いい加減に！」と言いながらカウンター越しに覗きこんでみると、これは、いったい、何という事！ カウンターの中に入っていたのは、タ・ヌ・キだったのです。何？ どうして？

小さな狸が背伸びして食べ物などない冷凍庫にしがみついているのです。自分の目が信じられずしばらく声もでません。猫達は？ と見渡すと、やはり少し離れた



ところで私と同じように、ボカンと小狸の姿を見えています。それを見てやっとなりに返った私が、「キャ！」という声を上げると、小狸はあわてて走り去りました。どうやらさっき裏口を開けた時、ちゃんと閉めなかったようです。追いかけてみましたが、その小さな茶色い影は闇の中へ消えていました。皆さんこんな経験がありますか？

結構怖いものですよ。家の中にいきなり狸が現われるのは、くれぐれも気をつけて下さいね、夜中の狸には。

to be continued

この夜私が目撃した狸は実は、アライ熊だったのではないかという話です。顔はまさに狸でしたが、尻尾までは確認できなかったので確かではありません。実に、驚きの出来事です。皆さん狸ばかりでなくアライ熊にも気をつけましょう。

SLEEP

また、この道に迷い込んでいる。男は霧雨舞う山の中、切り立った山肌を見上げてため息をついた。いつ降り出したともわからないほど細かい雨の中、切り立った山肌を一面に雨露に濡れた紫陽花の花が覆いつくしている。死人の血を吸ってその花びらを色づかせると言われる紫陽花は、雨に濡れて赤や藍に妖しく光を放っている。さらに山の奥、高い木々におおわれた薄暗い森の中を歩いて行くと、少し平らになった地面があらわれる。幾つかの古びた大きな岩が転がって、草も生えず、奥には小さな洞窟がある。そこは、何百年も昔、戦わずして立てこもった武者達が多くの家来を道連れにして惨たらしく自決した屋敷の跡だと言われる場所である。昼間から薄暗く、こんな静かな雨の日は、耳をすますと小さな洞窟の奥から何やら人の声が聞こえてくるという噂もある。前にもこの山の奥に迷い込んでしまったことがあった。気がつくと大きな岩の上に長々と眠っていた。目が覚めたのは、もう朝だった。その後も何度もそういう事があった。こんな霧雨の日に限って・・・山の奥とはいえ、自宅からそう遠くない、歩いて一時間ほどの場所である。雨の中一時間も迷い歩き、その間まったく記憶がないとはどういうわけだろう。自宅でじれて待つ妻の姿が目に見えた。あの日以来、妻は私のことを疑いの目で見ると。一晩中雨の中あの岩の上で眠りかけているとは自分でも信じられない。ただいつになく穏やかな眠りだったような気がしていた。長い夢の間、色んな人があらわれて何か話しかけてきたようだ。あれ以来、不思議な感覚にとらわれることがある。自分がどこかほかの世界から迷い込んできたような気がするのだ。あの頃から何もかもがうまく行かなくなった。どこへ行っても自分の居場所がなく、どうにも心が落ち着かない。まわりの人達も奇異な目で見ているような気がする。家に帰っても、妻の目が冷たくつき刺さる。霧雨はますます細くなり、もやのように腰を覆い始めていた。男は、いつもの場所のいつもの岩に腰を掛けた。岩の上は温かく、我が家に辿りついたように安心できた。ふと、誰かの声を聞いたような気がして降りかえると、「ここへ、来ると分かってたわ」と、洞窟の前で妻が微笑みかけている。「だって、こんな風に急に霧雨が降り出す時は必ずここへいらっしゃるでしょう？ また迷って帰ってこられないかと思って・・・」いつの間に来たのだろうか。妻は、どこか特別の外出をする時に着る白地に赤や藍の大きな花をあしらった和服を着て立っている。男の目から大きな涙が溢れ出た。ようやく懐かしい我が家へ帰りついたような気がした。「そうか、さあ一緒に家へ帰ろう。その前に少しここに坐っていてもいいかい？」二人は並んで岩に腰をかけた。白いもやが二人をつつんでいた。翌朝になっても男はまだその岩に坐っていた。たくさんの色鮮やかな紫陽花を胸いっぱい抱いて、真白な顔をして静かに眠っていた。



BERGER & WIRTH

